

白選五十一首



■ 蒔田さくら子 ■

まきた・さくらこ 1929年、東京生まれ。46年「をだまき」に入社し、50年、合同歌集『飛天』に参加の後に退社。51年「短歌人」に入会。53年編集委員に推され現在にいたる。54年「十月会」の結成に参加する。歌集は『秋の椅子』から『海中林』まで7冊。ほかに『現代短歌文庫・蒔田さくら子歌集』がある。

寶石はきらめき居たりおのづから光る術などわれは知らぬに

淡路島かすむ渚にありてなほひとりのひとを忘れざりけり

ひとりゆく君が旅路に愛でまさむ海の妬まし山の妬まし

芥子畑に実は熟れにつつ我は未だ快樂と呼ぼむ貪りを知らず

指触れし銀の器はたちまちに曇りを帯びて我を拒めり

母が墓標に夏の光のしらじらと生きて倅せなりしかと問ふ

束なせる切り口密に寄り合ひて担がれて行く花の荷に遇ふ

なめらかに嘘がいへるといふことのたのしさも知りてもう若からず

背後より窺ふものをだしぬけに振り向いて見たし蛇の自在なる首もて

火を放ちゆきたるは誰 もつれ合ひよぢれて春の野に起つけむり

返り血を浴びて戻れる辻斬りの心かくやと手を洗ひ居つ

『秋の椅子』

『森見ゆる窓』

『紺紙金泥』

第一歌集『秋の椅子』は、歌集の出版がまだ一般的ではない一九五五（昭和三十）年に、『短歌新聞社』発行の歌集第一号として刊行された。ほぼ文庫本に近い、新書判と称する小型なもので定価は百円だった。当時、私は二十六歳になったばかり。若い無名の者の歌集出版は、ほとんど考えられない時代だったから、私自身は歌集刊行など、全く望んではいなかったが、周囲からの強い勧めがあった出版の運びとなったのである。作歌を始めた十七歳頃からの作品で、多くは幼い相聞歌だった。早い出発ではあったが、何の覚悟も自信もなく、成り行きで押し出されたような形だったのだ。

十年後、『森見ゆる窓』を刊行したが、「み

黒白を問ふ鋭さにつかのまの稀妻われをあらはにしたる

永劫の薄ら笑ひと思ふまで掲げて古りしわが女面

無花果のさらさらとせる舌触り ふしぎなものを我はよろこぶ

生きて在る厚顔をこそ讀むべけれ今日すこやかに終る飲食

撫で上げてゆく風のなか揺り椅子に咽喉官能の筒とし震ふ

すかし見る陰画に黒衣のわれが居りかの夜ほの白く装ひにしを

さりげなく「男なれば」といひし言 肉感としていま蘇る

逆光に總身透きてあらば見よ われはこれだけ これだけのもの

汝がコート借りて羽織りぬ男とはこんな広い胸郭なるか

消防車光り輝き欲びへ馳せゆくごとし遠き昼火事

革椅子の革のほひもうち伏して歎きし覚えのあればこそ知る

人よ一氣になだれてみぬか騒然と撲ちあひ落つる水に声あり

父の木と仰ぐ大樹の下蔭や踏み入るわれの明暗を呑む

つゆの世はつゆの世ながら存へて万灯流すこの濁り川

ふくぎつに枝差し交はしるる樹林 木は争はぬものにあるらし

咲きたるは咲かざるよりも苦しけれ地を擦る萩のこの乱れ様

奪ひても欲しとぞ思ふものはなくなくて足れりといふにもあらず

ブラインド通す光の縞のなか不穩なる朝の新聞ありぬ

今生の納めのさくら観る人もあるべしおのれと誰か思はむ

壯過ぎしわれと盛りの汝と来て仰ぐさくらの色異ならむ

「淋しき麒麟」

「鱗翅目」

ずみずしい感覚」などといわれて、若さゆえに許容される時期を過ぎ、素材も表現も地道で確かなものをめざさなければ、早晚ゆきづまると思い始めていた。その結果、以後十六年間、私は歌集刊行も考えず、ひたすら自閉的に己に籠って作歌していた。

こうして長い間、鳴かず飛ばすの私だったのが、「紺紙金泥」により、第九回日本歌人クラブ賞を受賞することができた。現在とは違い、歌壇の賞の少なかった時代であり、「短歌人」では結社外の賞の受賞は初めてだったので、周囲からも喜んでもらった。長い間の試行錯誤の過程で、四十代の半ばから抑制を振り切つて、外向的な作品へと変化していったのだ。この期間に父を失つてもいた。実作はしないが短歌が好きで、私が作歌に入る道筋を聞いてくれた父だったが、これで親はもう無いのだという実感が、精神の自立をうながしたのである。ようやく歌への意欲が高まった。居直ったというか、腰が据わったのである。

その後、結社の発行人を編集委員と兼務し、十一年余を激務の中で必死に作歌しながら、「淋しき麒麟」「鱗翅目」を刊行。当時の緊張感も今は懐かしい。考えてみると、私の歌集の数は決して多くはない。自分なりのペースで結果を出してゆきたいと思うからである。

黒豹の全き黒に日当れば焙り出すごと豹文浮き来

とろとろと陽は街上にただよひて世は事なきか ないやうな昼

薩摩切子の紅を透かせば騷擾の世すらはのぼの騙されてしまふ

明暗はげに際やかに髑髏あり突出せしものみな孔となり

束ねるる髪こまやうの根ふつと緩びたり古鏡のやうな月せり上がり

二人よりは一人見る海一人より亡きものと見る海こそよけれ

歳経りて入る菖蒲湯や 男おとこごろの雄々しからざる数多も見来つ

牛蛙ばうばうと啼き孟蘭盆果てし夜死者のかへりゆく道

江戸川区鹿骨ししほねよりぞ運ばれて藍あざすずしかる市いちの朝顔

告別といふ語かなしき式次第 柩の中のひとも従ふ

葉は隠りの椿つばき一花の鋭とき赤さ やや退ひきて見むこの世のことは

赤き花一樹めくを回り火だるまの椿となりてしんと立ちをり

「截断言」

瀬戸内のひとの裔すえなりしづかなる海の没陽をふところに抱く

川水に触れつつ葦の聞くならむ流るる音は時の去る音

うすき悲哀の膜のごとかる夏ごろも着ても脱ぎてもはかなかりける

縛入りし鶴首水瓶すいびやうむらむらと割りたくなりて細首つかむ

通夜の宵まだ新しき死者のため集ひくるもの旧ふるりたる生者

いつもそこで必ず狂ふレコードの瑕きずのごときを身に持てりけり

時しばし借らば心のしづまらむしづまりてのち怒りは立てむ

「海中林」